苦しみを乗り越えて

佐沼中３年

加藤 海音

Kato Kaito

第41回少年の主張全国大会
審査委員会委員長賞

「緊張したけど、練習通り自分の気持ちをそのまま発表しようと思って臨んだ。受賞したかったわけではないが、うれしかった」と笑みをこぼした。

第41回少年の主張全国大会が２０１９年12月８日、国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都）で開かれた。佐沼中３年の加藤海音（かいと）さんは「十人十色」と題し、自身が発達障害で苦しんだ経験を発表した。市、県、北海道・東北ブロック大会を突破し、市内初となる全国大会に出場。特別賞である審査委員会委員長賞を受賞し、全国約50万人の応募の中から上位５人の入賞者に選ばれた。

発達障害とは、自閉症、アスペルガー症候群、学習障害、注意欠陥多動性障害などの症状が、低年齢で発現する障がい。加藤さんは、中学１年まで特別支援学級に所属していた。「小さい頃は、笑われたり意見を聞いてもらえなかったりする理由が分からなかった。小学５年生の頃から、周りの人と違うと感じ始め、毎日苦しかった」と、悩みながら生活していた過去を打ち明ける。

そんなとき、救ってくれたのが、特別支援学級の先生や友達、そして家族だった。「毎日早く時間が過ぎてほしいとばかり考えていた時期もあったが、先生、友達や家族が悩みや話を聞いてくれたので救われた。小学校の頃は特別支援学級に行くのが嫌だったが、小学校を卒業してから、そのありがたみや必要性を実感した」と感謝の思いを語る。

「発表しようと思ったのは、発達障害の理解を深めてもらいたいから。自分と同じように苦しんでいる人たちのために何かしたいと思った。発達障害があると、周りと違う意見を言うこともあるが、悪気があるわけではなく、自分の考えを話しているだけ。周囲の人が障がいを個性と考え、ありのままを受け入れることで、苦しむ人は減るはず」と訴える。

加藤さんの将来の目標はシステムエンジニアになること。「高校では勉強を頑張って夢の実現に一歩でも近づきたい。前向きに目標を持てるようになったのも助けてくれたみんなのおかげ。今も苦しんでいる人はたくさんいると思うが、救いの手を差し伸べてくれる人は必ずいる。そのことを忘れずに、目標を持って生活してほしい」―。

障がいの苦しみを乗り越え、夢に向かって新たな一歩を踏み出した。

―― 十人十色 ――

「皆さんの目に、僕はどのように映るでしょうか」。

僕は、発達障害を抱えています。そのため、小学校から中学校一年生までの7年間、特別支援学級に所属していました。発達障害とは、主に先天性の脳機能障害が原因となって生じる発達の遅れです。どうしてそうなるのか、詳しいことはまだ解明されていません。発達障害にはいくつかの種類があって、僕の場合は人の気持ちや感情を読み取ることが苦手で、対人関係をうまく築けないことがあったり、特定のものに興味やこだわりを持ってしまうため、協調性に欠けることがあったりします。この障がいの厄介なところは、パッと見ただけでは分かりにくく、周りに理解されないという点にあります。そのため、障がいそのものよりも周りに理解されないことに苦しむことがたくさんあるのです。

小学校の頃、僕が発言すると笑いが起きたり、「もう一回言ってみて」と何回も同じことを言わされたりしました。最初は状況が読めず、言われるまま繰り返していましたが、バカにされていると気付き、発言するのが怖くなったことがありました。

また、みんなで話し合っているとき、自分の意見を言うと「支援学級だから」と意見を除外されたり、意見が合わないと「障がい者だからしょうがない」と一言で片付けられたりしました。頑張って伝えようとしているのに、伝わらない。見えないバリアが張られているように感じ、悔しくて悲しい気持ちになりました。周りの理解が得られないもどかしさ、特別支援学級への偏見や差別的な言動は、僕を苦しめました。

ただ、誤解を招く原因が僕にあったのも事実で、だからこそ特別な支援を受ける必要があったのです。僕には担任の先生とは別に、補助の先生が付いてくれました。自分をうまく表現できないことがあると、気持ちを代わりに伝えてくれたり、トラブルに気付いて助けてくれたりしました。もちろん、僕が間違ったことをしたときには、その場でどこがいけなかったのか教えてもらえたので、とてもありがたい存在でした。また、僕の家族にも感謝しています。みんなと違う僕を、無理に何かできるように訓練したり、できないことを怒ったりせずに、やりたいことを自由にやらせてくれました。特別支援学級に所属することを嫌だと思ったことは何度もありますが、その支援を受けることができたから、今の僕があるのだと思います。

皆さんはご存知ですか。偉大な発明家トーマス・エジソンが発達障害だったことを。Apple社を創設したスティーブ・ジョブズ、Windowsを開発したビル・ゲイツも発達障害だったといわれています。彼らは、周囲の人々と異なる特質を持ち、ある分野に強いこだわりと異常な興味を示しました。だから、いつも好奇の目で見られ、変人として扱われたそうです。しかし、その特質が新しい考えやアイデアを生み、パソコンやスマートフォンなど、今の僕たちの生活に欠かせない機器を生み出したのです。この話を知ったとき、僕は自分の障がいはある意味、特別な個性なのではないかと思うようになりました。現在、日本の小中学生の約7%が発達障害を持つというデータがあります。つまり、クラスに2、3人はいるという計算になります。僕がここに立って自分のことをさらけ出そうと思ったのは、僕と同じように苦しんでいる誰かの役に立ちたいと考えたからです。目に見えないからこそ、分かってもらえるように発信していかなければならないと思いました。

皆さんは、自分と異なる部分や劣るところにだけ目を向けていませんか。できることとできないことがあって当たり前。10人いたら、10通りの個性があるのです。障がいを一つの個性と捉え、その個性が輝くような社会にできたら、どんなにいいだろう。僕はこれからも、自分の個性を堂々と語ることで、発達障害への理解を広げていきたいと考えます。

大会の様子は「国立青少年教育振興機構」のホームページで閲覧できます。
https://www.niye.go.jp/services/plan/syutyou/download.html